

阿嘉島海中ガイド

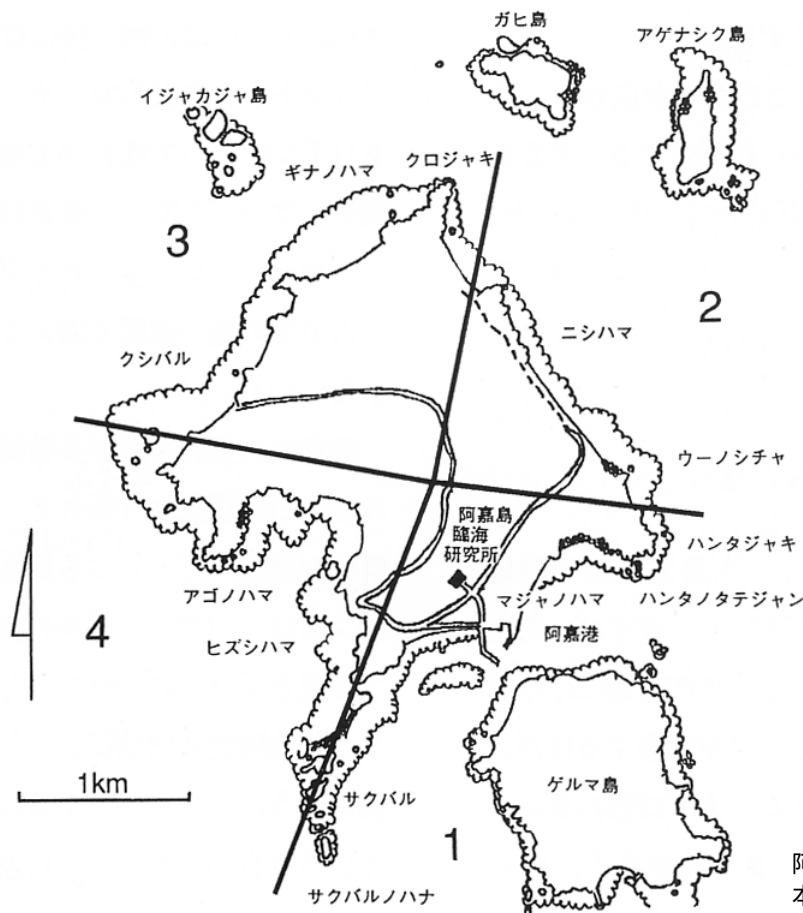
阿嘉島一周遊泳観察

下池和幸
阿嘉島臨海研究所

Under water guide to Akajima Island

K. Shimoike

前号で、阿嘉島を研究用フィールドとして利用してもらうためにライン調査を行い、5 地点における底質及び生物相を紹介した。今回は島の周辺海域における生物の水平分布を調査するため、1989 年と 1991 年のそれぞれ 2 月に島を一周した結果を紹介する。調査は阿嘉港から出発し、シュノーケリングで礁縁部に沿って島を一周 (約 12km) しながら、その間に観察された生物を記録していった。また同じに、サンゴの分布状態も記録した。



阿嘉島周辺図。図中の数字は、本文中の解説区分を表す。

1. サクバル~ハンタジャキ

この海域の両端、サクバルノハナおよびハンタノタテジャン付近は散房花状ミドリイシの小群体や被覆状サンゴが僅かに見られるのみで、ほとんど岩盤がむき出しになったままである。これは岩が垂直に切り立った地形のため波による影響が強く、サンゴ幼生の着生及び成長が阻まれるためと思われる。し

かし、サクバルノハナはヤコウガイがよく見つかる場所でもある。

サクバルとゲルマ島の間は湾のような地形になっている。海中には阿嘉島から南に伸びた根がいくつも重なっており、コブシメの産卵床となる枝状ハマサンゴやアナサンゴモドキなどが多い。また、トサカハギのまじった Denghagi の数十尾もの群れや、

ミヤコテングハギの群れが常に群泳する。その根は水深 10m 程で砂地に続き、ハマフエフキ、スジアラ (ハタ科) も多く見られる。またこの砂地には、水深 10m 付近とサクバルの東、水深 30m 付近に漁礁が沈められており、その上をよくツバメウオが泳いでいる。

阿嘉島～ゲルマ島間には船の往来のための水路があり、底は砂地で、阿嘉島側にミドリイシの小群体が発達する。

阿嘉港内の棧橋先端部には、枝状ミドリイシを中心にサンゴがよく発達しており、ガンガゼ、オオイカリナマコが多く、ヘコアユ・ゴンズイなどのほか、ゴマアイゴが群泳する。

マジャノハマの浅瀬にはゴロタ石が広がり、これにミズタマ (カサノリ科) が群生する。その先はサンゴ礁の根が続き、水深 10m で砂地になるが、港工事と淡水の流入で濁っており、サンゴは、アナサンゴモドキやハマサンゴなどがわずかに見られるのみである。

2. ニシハマ

浜の中央部は礁原が短く、水深 30m まで砂地の斜面が続く。所々に岩が点在し、ダイバーのために餌付けされた魚が群れる。この砂地には水深 20m 前後の所にトウカムリガイが生息するほか、チンアナゴが見られる。また、ナマコ類も多い。

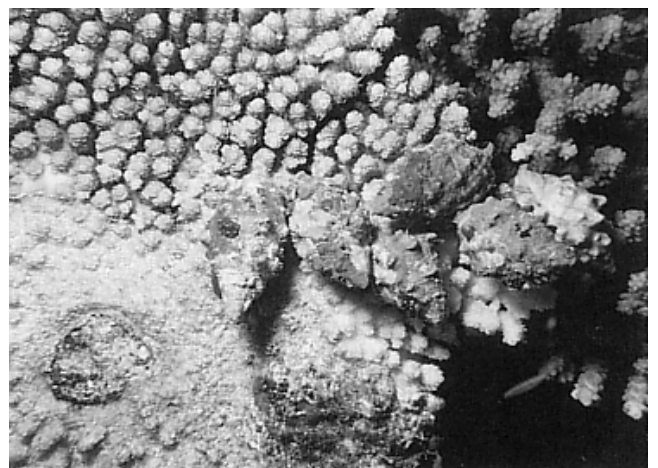
礁縁部ではロクセンスズメダイが多く、4～7月にはテーブルサンゴの下などに多くの赤紫色の卵を産みつけ、外敵から卵を護っている姿が見られる。また、テズルモズルも多く、夜になると岩上で大きく腕を広げる。ほかには、ウミシダ類、ナマコ類などの棘皮動物が多い。水深 20m の根の上には、慶良間では珍しいイジマフクロウニが見られた。

礁縁外側には、沖縄でタマンと呼ばれるハマフエフキが、常に 30 尾ほどの群れをなして泳いでいる。

ニシハマ周辺の水域は、潮流は速いが波が比較的

穏やかなため、浜の南端から 200m 程度離れた礁原には、大きく発達したテーブル状や枝状のミドリイシの群体が見られ、その間を被覆状のコモンサンゴ、キクメイシの仲間などが埋めている。しかし礁縁部から礁斜面にかけては、2 年前に大発生したオニヒトデのために被害を受けたテーブル状ミドリイシなどの残骸が見られる。ここでは生き残ったサンゴも白くなり、衰弱している。この礁斜面から砂地に続く根には、ウミキノコ、ヤナギカタトサカなどのソフトコーラルが群生し、ミドリイシにとって代わって増えてきている。また現在、サンゴを食べる巻貝のシロレイシガイダマシやヒメシロレイシガイダマシなどがミドリイシの被度の高い礁原で増えてきており、白い食痕が目につく。

昨年は大型の台風が多数襲来したため、テーブルサンゴが根元から折れて、上下が逆さになった群体が礁原内にくつも見られた。逆さになったサンゴは、以前テーブルの裏側だった部分のポリプが光を受け、勢い良く伸びて再生している。サンゴは物理的な破壊に対しては、比較的再生力が強いようだ。しかし、巻貝による食害が増えてきている事や、オニヒトデに食べられた痕がなかなか回復しないのは、サンゴ礁をとりまく環境が悪化しつつあるため、とも考えられる。



シロレイシガイダマシ

3. クロジャキ~クシバル

この海域は外洋に面し、塩通しが良いため透明度が高い。ミドリイシを中心にサンゴ被度が最も高く、水深 20m までミドリイシが生育している。

イジャカジャ島からクロジャキ、ガヒ島にかけては水路状の地形になっているため、潮流がとて速い。ここからウーノシチャにかけては、大型回遊魚の通路になっており、マンタの愛称で知られるオニイトマキエイやマダラトビエイ、サメ類などが良く見られる。

波を受ける浅い礁縁部は、骨格のしっかりしたミドリイシの群体に覆われるが、深くなるに従いヤギ類が多くなる。

ガヒ島の西の水深 10m 程のなだらかな礁斜面には、直径 2m を越える巨大なテーブルサンゴ群が発達する。2 年前にはこの島の南にオニヒトデが大量に生息していたが、現在はほとんど見られない。

クリジャキの先端部は、岩が切り立った地形となっており、サンゴ被度は低く、水深 20m にかけての礁斜面には、ソフトコーラルが群生するほか、カイメン類も多い。

一方、イジャカジャ島とギナノハマの間はやや内湾的の性質を帯び、枝状ミドリイシやユビエダハマサンゴなどが多く、これらはコブシメの産卵床となる。

クシバルは水深 20m までサンゴ礁の根が続いた後、細かい砂地に鳴る。サンゴの被度は高く、礁斜面はテーブル状のミドリイシでびっしりと覆われている。

4. アゴノハマ・ヒズシハマ

阿嘉島で唯一大きな湾になっており、陸水の影響を受けやすく、湾の内側ほどミドリイシの被度は低くなる。キクメイシ類、アザミサンゴ、コモンサンゴ、ハマサンゴ、リュウモンサンゴ、キッカサンゴ、アナサンゴモドキなどが目につき、海藻類も多い。湾内の水路には、大型の塊上ハマサンゴが点在する。

礁原内の浅瀬にはアマモ場が広がり、夏にはアイゴの稚魚などが多く見られる。

礁縁部は切り立って水深 5~15m まで落ち込み、壁にはリュウモンサンゴ、キッカサンゴなどの葉状のサンゴがみられる。また、この礁縁部には洞窟状の地形が多く、ネムリザメがいる事がある。

礁縁下は砂礫底になっており、ブンブクなどが生息するほか 10~15m 水深の海底面上にはアミの群れが良く見られる。またこの砂礫底に岩が点在する場所は、沖縄でアカジンミーバイと呼ばれるスジアラが多く生息し、5~6月の産卵期には 20 尾ほどのハレムが観察された。また同じ時期、産卵のため浜に上がって来るアオウミガメやアカウミガメも見られる。

阿嘉島周辺海域では、2 年前オニヒトデが大量に発生したが、その際に行った駆除作業の成果が、現在ではほとんど見られなくなった。全般的には食害にあったサンゴ礁も徐々に回復に向かっているが、ニシハマのように一部で回復が遅れている場所や、シロレイシガイダマシなどによる被害が出ている場所もあり、いつまでも楽観は出来ない。今後も更に監視を続け、サンゴ礁保全のための対策を講ずるべきだろう。